

旧制松江高等学校同窓会機関誌「翠松」
松江白線クラブ夜話 第六十八話

「伊豫」語源新考

西
上
一
義

「伊豫」語源新考

西 上 一 義

愛媛県「伊予」の国名の由来について、『古代地名大事典』によれば、古くから三説があるという。

一 四国の古名「弥二並島」（ヤニナラブシマ）のヤに発語イがついてイヤとなり、転じてイヨとなった。
（古事記伝）

二 出湯（イデユ）由来説

湯（ユ）に発語イが付きイユとなり、転じてイヨとなった。

三 発語イ＋善からイヨとなった。
伴信友説（江戸後期国文学者）

しかし、その後、様々な説が出されながらも、定説が得られぬまま、現在に至っている。

（小泉道『愛媛県大百科事典』）

そうした状況下で、筆者は、四国の各地に美林を作るクスノキが語源になったのではないかという考えに至ったので、それを纏めてみた。

私の所属する日本植物学会の中四国支部大会が、数年に一度、初夏の松山か高松で開かれている。この季節、山陰から海を越えて四国へ渡るたびに、市街地や丘陵地帯のクスの新緑の美しさに心を奪われる。

四国とクスとは太古以来密接な関係があるのでは？という疑問を、やがてもつようになった。その矢先、司馬遼太郎の『空海の風景（上）』（中公文庫）を読んだ。

その九二ページ、空海が著した『三教指帰（さんごうしいき）』の自己紹介に当る箇所には、自分の出身について「玉藻よる所の島、櫟樟（よしゅうクスノキ）日を蔽（かく）すの浦に住せり」と表現されている。

当時（奈良時代）、四国の北の海岸部即ち瀬戸内海沿岸・豊後水道沿岸は、クスの自然林で厚く覆（おお）われていて、日もよく見えぬ程であったらしい。

歴史を更に数百年かそれ以上も遡り、日本の歴史が始まるもっと以前の頃、クスの漢字を知る渡来人が四国へやって来て、そのクスの美林を目にし、「これは櫟よの国だ」と感慨を込めて言ったことは想像に難くない。

柴田一郎他『新大字典』（講談社、平成四年刊）を調べると、木部十六画の箇所には、確かに「櫟」の文字が見える。音はヨ。字義は「くすのき」とある。

また、小柳司気太『漢和大字典』（博文館、昭和十一年刊）では、同じクスの意味をもつ樟

とつないで、「櫟樟」という語あり」と出ている。

空海の「櫟樟日を蔽す」の表現と、漢和字典に収録された「櫟」の存在を考えれば、この文字こそ、伊豫の国の語源ではあるまいか。

さて、櫟の音は、現在はヨであるが、恐らく古語の発音では、発語イが前に付き、イヨであったであろう。その後、時代の推移とともにイが大きくなってイヨとなり、それに漢字を当てて「伊豫」と表記されることになったと想像される。

「ヨ」の音をもつ漢字は数多くあるが、古来、イヨの国のヨに豫が当てられているのは、国名がクスの漢字「櫟」に由来するからと考えるのが、自然ではなからうか。

また、イヨの「イ」に、「以」もしくは「衣」などの文字が用いられず「伊」が当てられている点については、さらなる思索が必要であるが、単純に考えれば、「伊」にはコレ、コノという意味がある。「伊豫ノ国」は、「このクスノキの国」、または、「これクスノキの国」となり、「伊」は「豫」の冠詞の役を果たしていて、両語はみごとに組み合わせになっている。

伊豫の国名の由来については、前述のように多くの説が議論されているが、ここに「櫟（クスノキ）」説」別称「櫟樟（ヨシヨウ）」説」を提示して、諸賢の御高評を仰ぎたい。

参考文献

- 土井中照著 松山地名町名の秘密 アトラス出版 平成十五年五月三日
古代地名大辞典本編 二一九～二二〇頁 角川書店 平成十一年三月十日
愛媛県大百科事典上 愛媛新聞社 昭和六十年六月
司馬遼太郎 空海の風景(上) 中公文庫 平成二十三年四月三十日
榮田一郎他 新大字典 講談社 平成四年
小柳司気太 漢和大字典 博文館 昭和十一年

(島根大学名誉教授・日本植物学会会員)